

気象変動に負けないコシヒカリを作ろう!! ～「R7 JAなのはな米品質向上運動」実施中～

来年の水稻栽培に向け、今秋のうちに“土づくりと雑草対策”に取り組み、異常気象に対応出来る“地力向上・雑草の密度抑制”に努めましょう！



1 土づくり

①土壌改良資材(ケイ酸質資材等)の施用 → ケイ酸・加里の確実な補給と保肥力の向上

- (1) 土壌改良資材の施用を中断すると土壌中のケイ酸含量が急激に低下します。継続的に施用しましょう（表1）。
(2) ごま葉枯病（写真1）が多発したほ場では、鉄分を含む資材を施用しましょう。

ケイ酸質資材施用による効果

- ① 稲体の姿勢が良くなり、光合成能力を高く保ち、登熟や品質が向上
② 割粃が減り、斑点米を軽減
③ 茎葉や根が強くなり、倒伏を軽減
④ 病害虫に対する抵抗力が向上

表1 土壌改良資材の特徴と施用の目安

資材名	資材の特徴	標準施用量 (10a 当たり)
珪酸石灰	ケイ酸・石灰・苦土・マンガンを含み、倒伏や病害虫の抵抗力が増大する	200kg
シリカロマン	溶出に優れたケイ酸により、倒伏や病害虫の抵抗力増大に役立つ。リン酸、苦土・鉄が補給できる	100kg
シンキョーライトP	根張りとし地力を高め、品質と収量の向上に役立つ。ケイ酸補給もできるゼオライト資材	60kg
新アサヒニューテツ	土づくりに必要な鉄や苦土、ケイ酸を補給し、アルカリ分による土壌の酸度を矯正する	100～150kg
スーパーけいさん鉄	土づくりに必要な鉄や苦土、ケイ酸を補給し、アルカリ分による土壌の酸度を矯正する	100kg



写真1 ごま葉枯病の病斑

②有機物の施用 → 腐植含量及び保肥力の向上

- (1) 土壌の腐植を増やし保肥力を高めるには、有機物の補給が有効です（表2）。特に、堆肥や発酵鶏糞にはカリ等の養分が含まれるので、積極的に有機物を施用しましょう。
(2) 水稻収穫後、稲わらをすき込み、腐熟を進めましょう。

表2 堆肥の施用の目安（秋施用の場合：10a 当たり）

種類	乾田	半湿・粘質田
牛ふん堆肥	1～2t	1～1.5t
豚ふん堆肥		
粃殻堆肥	2t	1～2t
発酵鶏糞	150kg	100kg

※わら分解促進資材

資材名	主な成分	標準施用量 (10a 当たり)
わらゴールド	セルロース分解菌、窒素 2.1% リン酸 5.5%、カリ 3.7%	30kg

※微生物と有機物の連携で稲わらの腐熟を促進します

なのはな農協では、土づくり助成として「ケイ酸質資材及び有機質資材の散布」支援を行っています。詳細は各支店へお問い合わせください。

2 秋の雑草対策

近年、収穫時にヒエ等が多発しているほ場が散見されます。雑草の発生が多いほ場では、複数年にわたる継続的な雑草対策により発生量を減らしていくことを心がけましょう。

①「本田」の雑草管理

剤名	散布量（10a 当たり）	備考
石灰窒素	40～50 kg	・発芽促進により秋の内に発生させたヒエをすき込み、翌年の発生密度を減らす。 ・稲刈後、気温の高い時期の散布が効果的。 ・翌年水稻を作付けする場合、基肥減肥を検討。
プリグロックスL	800～1000 ml (希釈水量 100～150ℓ)	・1年生雑草（ヒエ、クサネム等）種子の発芽抑制等により翌年の発生密度を減らす。 ・また、こぼれ粃などからの次作の水稻の漏生稲発生を減らす。 ・土中の種子には効かないので、秋耕は行わない。 ・ワラの下にある雑草種子まで薬液が確実にかかるよう散布量をしっかり確保する。
ラウンドアップ マックスロード	1年生雑草：200～500ml 多年生雑草：500～1000ml (希釈水量 50～100ℓ)	・塊茎（球根）を形成する雑草（クログワイ等）にも茎葉から浸透移行し、翌年の発生密度を減らす。 ・稲刈後、気温の高い時期の散布が効果的。 ・雑草全体に十分薬剤が付着するように散布量を設定する。

※プリグロックスL、ラウンドアップを散布する場合は風向きなどに留意し、付近の作物等にかからないように注意！

②「畦畔」の雑草管理

剤名	散布量（10a 当たり）	備考
カソロン粒剤 6.7	4～6 kg (雑草発生前～発生始期)	・秋冬期～春期に畦畔に散布することにより、6月頃まで雑草の発生を抑える。 ・カメムシの餌をなくし、カメムシの越冬世代と次世代以降の発生密度を減らす。

※大麦等畑作物の作付ほ場には使用できません。

秋の農作業安全運動（8月20日～10月20日） ・ 秋の土づくり運動（9月15日～11月15日）